

# 人文・社会科学の学術情報流通(下)

武蔵野大学

小西 和信



前号で人文・社会科学分野の研究を盛りたてるには、その前提として当該分野の学術情報流通が問題となるのであり、国や国の機関がどのような学術情報流通政策を出し、施策を実行してきたか、果たしてその成果はあったのかを一瞥した。

その中で、国立国会図書館や国文学研究資料館等の諸成果もさることながら、筆者の身びいきを棚上げして、国立情報学研究所の学術情報流通への貢献

について、全国大学所蔵資料の目録データベースの形成・提供 (NACSIS-CAT) と、わが国研究者の論文データベースの形成・提供 (CINii)、および新たな学術情報流通の仕組みとしての全国大学図書館等による機関リポジトリ形成支援の三点を採り上げさせていただくことにした。今号では、その続きを紹介するとともに、これから何が必要になるか考察してみたい。

## 論文が読めようか CINii

NIJ論文情報ナビゲータ CINii が話題を呼んでいる。論文データベースという馴染みのない分野にもかかわらず、ブログ等での言及が多く見られるようになった。世間の人々がこのデータベースの有用性に気づき始めたようである。

その要因は、平成18年4月からウェブ検索エンジン Google 及び Google Scholar と一部の情報検索可能になったことにあると思われる。自分の入れた検索語にヒットした「学術論文」がその場で読めようという一般ユーザは驚いたのである。最初は偶然訪れたが、次回は自覚的に使うようになる、そんなサービスとして受け入れられた。

加えて、今年4月からシステムが全面リニューアルし、検索性能が格段に向上したこと、検索結果表示などのインタフェースが洗練されたことなども与かって力があるだろう。従来、学術論文を読む経験のなかった層にも利用され始めている。また、一部には論文の重要性ではなく、CINiiで読める論文だけを利用してレポートを書く学生も現れはじめ、教師たちを嘆かしているとも聞いた。

CINiiは、国立情報学研究所の提供する学術コンテンツ・ポータル GINii のコンポーネントの一つ。ほかに、前号で紹介した Webcat Plus や科学研究費補助金研究成果データベース (KAKEN)、学術研究データベース・ディレクトリ (NIJ-DBR) などが入っている。

CINiiは、学術情報システムのもう一つの柱として昭和62年から開始された情報検索サービス NACSIS-IR 由来のデー

タベースに、わが国の S C I を目指した試み「引用文献索引データベース」と平成8年更新したサービスとして国内学協会誌の本文の電子化を進める「電子図書館サービス (NACSIS-ELS)」と統合し、その上に国立国会図書館の「雑誌記事索引」を加えた、わが国の研究者による論文データベースである。CINii 開始 (平成15年4月) 当初は、魅力あるデータベースの不在で輝きを失っていた NACSIS-IR サービスの延命策としてしか意識されておらず、ポジションを失ったデータベース・サービスとして、NACSIS-CAT などの陰に隠れた存在であった。

一方、平成14年に試験公開されていた大学等の研究紀要の全文画像データベース「研究紀要ポータル」があった。これは国立情報学研究所が当時推進していた大学等の紀要の電子化支援事業の成果を公開する場所で、のち NACSIS-ELS に合流し CINii に組み込まれることになる。

CINii は、このようなそれぞれ別途の目的で作成されたデータベース群のいわば「ごった煮」であった。今日脚光を浴びるに至ったのは、おそらく本情報を直に提供する論文情報データベースというコンセプトが時代に受け入れられたからである。また、特に強みと意識していなかった「日本人の研究成果」という点も、CINii を特徴づけることになった。今後の CINii の発展を考える場合、結果的に明確になったコンセプトに基づき、その欠落部分を埋めていく作業が望まれるということである。

CINii は、必ずしも人文・社会科学分野へのサービスを意図したものではなかったが、国立情報学研究所が例年行っている利用者アンケートの結果でも、圧倒的に人文・社会科学分野の利用が多く、また同分野の充実に対する期待も高い。ほかに類似のサービスがないこともあるだろうが、だからこそ CINii は人文・社会科学の学術情報流通への貢献を意識し、利用者の期待に応えていかなければならない。

## 無限の可能性—学術機関リポジトリ

もう一つの成果として、「学術機関リポジトリ」を挙げておきたい。機関リポジトリは、2003年のリンチの論文邦訳が NIJ の「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」のページにある) の定義によると、「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」とされている。大学等の研究機関に所属する研究者の許諾を得て、その研究成果物を機関として蓄積保管し、無料で世界に発信する仕組みで、オープンアクセスの手段として近年急速に推進されているものである。国立情報学研究所では、自らが進める「最先端学術情報基盤 (サイバー・サイエンス・インフラストラクチャ)」構築事業の一環として、平成17年度以来、「機関リポジトリ構築支援事業」を開始し、その結果、わが国にも100を超える機関リポジトリの誕生を見、蓄積された本文

付き論文は、約50万件になっている。膨大な論文数を考えると微々たるものではないが、ここ2〜3年の整備結果ということを考えて、無限の可能性を秘めているサービスと言えよう。(http://www.nii.ac.jp/irp/list/ http://irdb.nii.ac.jp/analysis/index.php)

何よりも学術機関リポジトリは、著作権処理の容易さから各大学とも紀要や研究報告から手掛けることが多かったことで、結果的に人文・社会科学分野の文献が多く収録される傾向にあり、同分野の学術情報流通の面からも今後の拡充発展が大いに期待される場所である。

国立情報学研究所では、GENiiのコンセプトの一つとして「学術機関リポジトリポータル」JAIROを新たに開発し、わが国の機関リポジトリの総合検索窓口としている。また、機関リポジトリに蓄積された学術論文のタイプは、CINI側からも一括検索可能になっている。

機関リポジトリについては、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会・学術情報基盤作業部会(部会主査・有川節夫九大総長)によって今年7月にまとめられた「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について(審議のまとめ)」の中で、第2章「学術情報発信・流通の推進」の主要な柱として整備の必要性が提言されている。国の政策レベルでも明確に方向性が出されている。

## これで十分なのだろうか？

電子ジャーナルが研究に不可欠な存在

なってほぼ10年が経過した現在も、その恩恵は人文・社会科学に及んでいない。特にわが国では、研究情報の大半を電子ジャーナルから得ているとする人文・社会科学研究者はいないのではないだろうか。

しかし、機関リポジトリの場合は、もともと紙媒体で発行された論文も電子化の対象となる。人文・社会科学分野における論文発表形態が依然として紙媒体を前提としても、機関リポジトリには電子化情報が集積されるのである。その点でも期待が膨らむのである。

さて、NACSIS-CAT、CINI、学術機関リポジトリと国立情報学研究所や大学図書館の献身的な努力の成果によって、わが国の人文・社会科学分野の学術情報流通の未来は明るいと言えるのだろうか。さすがに筆者といえども、この問いに同意することはできない。

全国蔵書のデータベースの不備については、すでにその項目で書いた通りであるが、詳細な分析としては、気谷陽子氏(筑波大)の「学術情報システム」の総体としての蔵書における未所蔵図書「の発生」(『日本図書館情報学会誌』53(2)、2007.6)など一連のNACSIS-CATデータベース評価がある。

では、論文データベースのCINIについてはどうか？ このデータベースの成り立ちからも想像できるように、一貫した方針の下に形成されたわけではない。結果的に人文・社会科学分野の論文も含むということも期待されているが、それは他に代替するデータベースが存在しなかったという理由による。後藤宣子氏

(愛知淑徳大院)は、「人文分野の論文データベース収録状況：CINI評価の試み」(Journal of Library and Information Science, 21, 2007)で、その欠落状況について指摘している。

明治、大正、昭和前期の人文・社会科学分野の雑誌記事のデータベースがある。皓星社の藤巻修一氏が渾身の力を傾注して作っているもので、『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成』全百二〇巻をベースにデータベース化したもの。ごく最近、旧植民地時代の雑誌記事も収録し、

「雑誌記事索引集成データベース」として有料サービスを行っている。同僚の近代文学研究者は、いまやなくてはならないツールの一つと高く評価する。CINIのようなサービスは、将来このようなデータベースとも適切な連携を図り、人文・社会科学に関心を持つユーザの利便性を追求していく必要があるだろう。

足りないといえば、これまでの斯界の個人データベースへの目配りである。後藤齊氏(東北大)は早くからウェブ上に存在する貴重な人文データベースの「ゆるやかな総合学術情報システムの形成」の必要性を訴えていた(「人文学研究とインターネット」、『人文学と情報処理』5, 1997)。こうした貴重なデータベースへのナビゲーションを実現したのは、ACADEMIC RESOURCE GUIDEの岡本真氏で「生成する目録」で744個のデータベースへのリンクを作成した。これは残念ながらすでに更新が止まっているが、岡本氏はその後も網羅的に学術情報資源を紹介し続けている。問題は、これらを

集合し個々のデータベースの中身を検索可能とすることである。国立情報学研究所の学術研究データベース・ディレクトリ(NII-DR)はそのようなものとして意図され、サービスされているが、今は単なる小規模データベースの倉庫と化している。ここは、CINI再開発の設計の中心にあった大向一輝氏はじめNIIの皆様にも再生計画をお願いしたい。

## おわりに

人文・社会科学分野の学術情報流通について概観してみた。お断りしなかったが、電子化された情報の流通を中心とした。その点では、e-Book(電子書籍)が、この分野の情報流通に大きな役割を果たすのではないかと思っている。紙媒体の文献の重要性を蔑ろにする気持ちは毛頭ないが、保存スペースの問題は図書館にとっても個人にとっても深刻である。書籍の持つ「可読性」に限りなく近づけたビューアも登場している。さらにインタフェースの改良とコンテンツの充実が望まれるが、個人で膨大な蔵書を持つことを可能にするe-Bookシステムは情報流通(特に人文・社会科学)に革新をもたらすのではないだろうか。

結論として、人文・社会科学を振興するための要件は、適切なデータベースの整備、それも本文付きのデータベースを、国を挙げて作っていくことに尽きるのではないだろうか。

(文学部教授・

国立情報学研究所客員教授)